

時空超える詩の対話



詩人 佐相憲一さん

詩人会議などで活躍する詩人の佐相憲一さん(44)が新宿区新大久保周辺に住んで3年がたちました。10年前に詩集『愛、ゴマファザラ詩』で小熊秀雄賞を受賞した佐相さんの、東京を舞台にした最近の作品や、詩や憲法9条への思いを紹介します。

(記事・内田恵子 写真・五味明憲)

昨年12月に出版した『時代の波止場』は、大久保界隈(かいわい)のコリアンタウンを舞台に書いた詩や、これまでの波乱万丈な自身の半生をテーマにした詩などをまとめたものです。

詩集は、佐相さんが暮らす街の多国籍な暮らしぶりなどを素材にした、どこか温かさを感じる作品を読むことができ、現代社会に生きる人のさまざまな姿、人の痛みを広い視点から見つめる作風が伝わります。

学生時代以来、20数年ぶりに東京に戻ってきた佐相さんにとって、コリアンタウンは仕事を終えた深夜、食事をしながら普段の自分に戻り、詩想を得ることが

できる場所でもあります。

詩集には、新宿の飲み屋から出てきたオフィスレディたちが「さっきまでの夕焼けを頬に残しながら」「温泉に行きたいね」「いいね、いいね」と会話したり、食事を終えた佐相さんが料理店で夢を語るイメージなどがあります。

詩「レストラン」は、

インド料理店で野菜カレーを食べていると//テレビに映る東北の惨状//黒い肌の店員が首を振る//中略//いろんな国の在日の人たち向けに味噌汁、ご飯食べ放題の草の根ニッポン料理店//平和憲法前文、九条、十一条、二十五条などを貼って詩集図書館も兼ねて

「大久保の街、作品に

いる//と展開し、「この境界の今アジア」に仮想敵国はない」と、書かれています。

佐相さんは新宿について「経済効率を優先するゆがんだ社会の中で悲しみやさびしさを感じながら、精いっぱい生きていることを感じる街」と語りました。

自由自在に障壁を越える

詩をつくる時に大切なことを、佐相さんは心のリズムだと言います。

「読み上げられることを意識して、耳でも感じるように、言葉を考えています」と佐相さん。

また、「地球の視野でものを見たり、歴史を動かしただ過去の人と対話したり、同じ時にあそこにもいればここにもいるという『偏在』の力」を大切にしていると話します。

小熊秀雄賞受賞詩集の『愛、ゴマファザラ詩』にはゴマファザラが生息する稚内近くの抜海でアザラ

シに見つめられ、しだいに「海を渡り、空を飛び、電波を流し、世界中友だちでいっぱい…のはずなんです」と思索する人間が登場します。

詩集『港』では、墓の前で「お祖父さんどこまで」

さそう・けんいち 1968年横浜生まれ。早稲田大学卒業。横浜、東京、京都、大阪を経て、現在東京在住。詩集『共感』、『対話』、『愛、ゴマファザラ詩』、『永遠の渡来人』、『心臓の星』など。詩誌『COAL SACK』共同編集人。詩人会議副委員長、日本現代詩人会、日本詩人クラブなど会員。個人誌『進化論』。



新大久保駅の前に立つ佐相さん

「ちょっと波止場まで革命をやり直しに」と話すなど、「コミカルであつてどこか深さを感じ、親しみやすい詩を大切にしていることが分かります。

佐相さんは「詩には、批評性と抒情性という要素があります。これは詩心で、数百万年のヒトの歴史でDNAが伝えてきたものです」と言います。「21世紀を詩心、詩文学が大切にされる時代になりたい。そのため発信の場、交わりの場であり、出発の場でもある『港』のイメージを温めているんです」と語りました。

体が9条を欲している

シに見つめられ、しだいに「海を渡り、空を飛び、電

波を流し、世界中友だちでいっぱい……のはずなんです」と思索する人間が登場します。

詩集『港』では、墓の前で「お祖父さんごまで」

九条の会詩人の輪は、茨

木のり子さん、宋左近さん（両故人）などが呼びかけ、2004年9月に結成。昨

年秋時点で1088人の詩人が賛同しています。

呼びかけ人の一人である佐相さんは同会が開いた14回の全国各地でのつどいのすべてに出席。会の通信に寄せた「私の原点」と題するエッセイで「体が9条を

欲している」と書きました。

その意味を佐相さんは、自分の名前に平和憲法の「憲」を付けられたこと、横浜が革新市政だった時に生まれ育ち、小学校3年5年を担任してくれた教師が「スクラム学習」という一人一人全員が分かるまで教え合うクラスづくりで熱心に指導してくれ、ほうっとした子どもだった自分をリーダーにしようと思いを押ししてくれたことなどを懐かしそうに話します。

他方、佐相さんの心には両親の離婚後に始まった同級生のいじめで、昆虫や生きものの好きで友だちのように大切に飼育していたカエルを殺されたこと、世の中が右傾化して行く中で弱肉強食の冷たい人間関係に傷つけられて生きてきたことが鮮明に残っているといい

ます。

「40数年の人生ですが振り返ると、憲法に守られて幸せに暮らしたかったという思いが強くなります。平和憲法はこれからの世界の理想を先取りした人類の願いです。心傷ついた寄る辺ない人間たちがともに生きていける社会を実現するために、改憲勢力に負けないでこの憲法を真に実現する政治に変えていきたいと思えます。そこそが詩の心に通じるのですから」と話しました。



最近出版した詩集、詩論集。（左から）時代の波止場、21世紀の詩想の港（コールサック社）、港（詩人会議出版）